金沢KOGEI
アクションプラン

―金沢の工芸の未来に向けて―

改定版

［概要版］

金沢市

令和6年3月

■ 金沢ＫＯＧＥＩアクションプランの改定について

○ 策定の背景

金沢の伝統工芸品産業は、藩政期からの長い歴史の中で、市民の生活と文化・経済を支えてきました。

本市では、歴史文化を生かしたまちづくりに取り組んできており、ものづくりを大切にし、産業として振興していくことでまちを元気にしたいという思いから、平成21年に「金沢市ものづくり基本条例」を施行し、さらに、ユネスコ創造都市ネットワークに世界で初めてクラフト分野で登録されるなど「手仕事のまち　金沢」を発信してきました。

また、平成22年には、伝統工芸品産業においても、これまで培ってきた技術を確実に継承し、世界に通用する新たなものづくりを進める必要があることから、その具体的な指針として「金沢市伝統工芸品産業アクションプラン」を策定し、「人材育成」「製品開発」「情報発信・販路拡大」「普及推進」の４分野を柱として位置づけ、様々な施策を実施してきました。

令和２年、新たな計画として、「金沢ＫＯＧＥＩアクションプラン」を策定しましたが、新たなプランでは、これまで進めてきた取組みを踏まえつつ、新しい時代に対応した工芸の需要創出と工芸技術の継承・発展に向けて、広く市民や地域、事業者等と連携、協働しながら「世界の工芸都市　金沢」を目指しています。

○ 改定の目的

「金沢ＫＯＧＥＩアクションプラン」策定から概ね３年が経過する中、能登半島地震による県内全域での被害の発生や、新型コロナウイルス感染症の拡大による社会・経済活動の変化、物価・エネルギー価格の高騰、デジタル技術の進展、「いしかわ百万石文化祭 2023」の開催、北陸新幹線の敦賀延伸など、市政を取り巻く環境は大きく変化しています。また、令和５年 12 月には、本市の新たなまちづくりの指針である金沢都市像「未来を拓く世界の共創文化都市・金沢」の策定に伴い、本プランとの整合を図る必要が生じました。これらのことを踏まえ、プランの中間見直しを行い、令和６年３月、必要な改定を行いました。

○ 金沢における伝統工芸品産業

本市には数多くの伝統工芸があり、その多彩さは国内屈指の水準にあります。金沢における伝統工芸品産業の存在は、基幹産業であるとともに、市民の質の高い生活を支え、「伝統工芸の盛んなまち」として、金沢のアイデンティティの根幹をなしています。

加賀地域に伝わってきた技術に、先進地であった京都のデザインや技法などが融合され、武家文化独特の豪華さと信仰心の厚い町衆の風土に根付いた繊細な様式を併せ持つ加賀調のデザインが確立されることで、金沢の工芸文化は、他の都市とは異なる独自性を持ち、国内外から高い評価を得ています。さらに、今もなお工芸品が日常生活の中で愛用され、豊かな生活文化を育んでいること、工芸的なものづくりの精神が現代の産業に活かされていることが、金沢における伝統工芸品産業の大きな特徴となっています。

■ 工芸の現状と課題

○ 工芸を取り巻く環境の変化

伝統工芸品産業は、ライフスタイルの変化や安価な海外製品の流入などにより、需要が低迷し、事業者数の減少、従事者の高齢化や後継者不足などに加え、道具・材料等の確保難など全国的に大変厳しい状況に置かれています。

本市では、積み重ねられてきた手仕事を次の世代に継承・発展させるため、重点的に人材育成に取り組んできており、金沢卯辰山工芸工房や金沢美術工芸大学などから多くの作家や職人が輩出され、国内外での活躍が見られるとともに、多様なつなぎ手も生まれつつあります。

こうした中、令和６年元日に発生した能登半島地震では、石川県内の伝統工芸品産業に甚大な被害をもたらしました。また、新型コロナウイルス感染症の拡大は、生活様式を一変させるなど、工芸を取り巻く環境は大きく変化しています。一方で、デジタル技術の進展に伴い、制作工程や情報発信にその技術を積極的に活用する作家や事業者も多く見受けられるようになりました。

本市においては、平成 27 年の北陸新幹線金沢開業を契機に、国内外からの来訪者が飛躍的に増加し、令和２年には、東京国立近代美術館工芸館の移転・開館も行われました。また、令和６年には、北陸新幹線金沢―敦賀間が開業するほか、金沢クラフト首都圏魅力発信拠点「KOGEI Art Gallery 銀座の金沢」が移転オープンします。

地震の影響が大きかった能登地方の伝統工芸品産業への復興に向けた取組みを推し進めるとともに、北陸新幹線金沢－敦賀間の開業など来るべき好機を的確に捉えるため、社会環境の変化に積極的に対応していくことが求められています。

工芸関係者とのヒアリング等からまとめた本市工芸の強み、課題、機会

強み	・国内屈指の多彩さ ・技術力と表現力の高さ ・歴史、文化との深いかかわり ・高い都市ブランド力 ・国際的な工芸展覧会の知名度の高さ	・若手工芸作家、職人等の活躍 ・民間催事の活発化 ・作り手への手厚い支援 ・育ちつつある多様なつなぎ手人材 ・文化都市・金沢の推進
課題	・需要の低迷、事業者数の減少 ・従事者の高齢化、後継者不足 ・道具、材料等の確保難 ・コロナ禍で落ち込んだ需要の回復 ・時代とニーズに即した情報発信 ・能登半島地震により被災した能登の伝統工芸品産業への支援	・つなぎ手の重要性の高まり ・生業とするための経営スキルの習得 ・モノからコト消費への対応 ・原材料や燃料の価格高騰への対応 ・インボイス等国の制度改正への対応
機会	・日本文化への関心の高まり ・工芸の美術的な価値への注目 ・文化の経済波及効果への期待 ・北陸新幹線金沢－敦賀間開業 ・大阪・関西万博の開催 ・「いしかわ百万石文化祭2023」のレガシーの継承・発展等による経済波及効果への期待 ・金沢クラフト首都圏魅力発信拠点「KOGEI Art Gallery 銀座の金沢」の移転開設	・環境配慮への関心の高まり ・国内外からの観光客の来訪 ・東京国立近代美術館工芸館の移転、開館 ・デジタル技術の進展

■ アクションプランの基本的な考え方

○ プランの位置づけ

本プランは、金沢の工芸の持続的な発展に向けた具体的な施策展開の指針とするものです。金沢市都市像「未来を拓く世界の共創文化都市・金沢」の実現に向けた行動計画である未来共創計画」を上位計画として位置づけ、「金沢版総合戦略」や「金沢市文化芸術アクションプラン2024」などの市の関連計画とも整合性を図り策定しました。

○ プランで取り扱う「工芸」

金沢の伝統工芸品産業の多彩さは国内屈指の水準です。「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（以下、「伝産法」という。）による指定を受けた６業種のほか、希少伝統工芸が20業種あります。この希少伝統工芸は、伝産法の要件をほぼ満たしながらも国指定業種ほどの産業規模を有しない業種等であり、後継者育成などの振興策の対象とされてきたものです。ただし、これらの中には従事者がいなくなったために失われた業種もあります。

また、金沢の伝統工芸の継承発展を図るための工芸の総合的施設である金沢卯辰山工芸工房では「陶芸」「漆芸」「染」「金工」「ガラス」等、従来の伝統工芸の技術を活かした新しい工芸の技術研鑽が行われています。

その作品は、作り手や使い手の志向性等に応じて、芸術的な表現を目指しながらも機能性をもった「美術工芸」、職人が量産し、多くの使い手に販売される「産業工芸」、個人作家等による少量生産で、普段の暮らしの中で使われる「生活工芸」に大きく分類されますが、極めて多様なジャンルの工芸品が生み出されているのも金沢市の大きな特徴です。

本プランでは、こうした多種多様な業種等を広く「工芸」として取り扱います。

◆ 国指定伝統工芸品…６業種

加賀友禅、九谷焼、金沢仏壇、金沢箔、金沢漆器、加賀繍

◆ 希少伝統工芸品（伝産法未指定のもの）…20業種

大樋焼、加賀象嵌、茶の湯釜、桐工芸、郷土玩具、加賀毛針、加賀竿、竹工芸、二俣和紙、加賀水引、銅鑼、金沢和傘、加賀提灯、太鼓、琴、三弦、金沢表具、手捺染型彫刻、かつら・かもじ、菓子木型

◆ 金沢卯辰山工芸工房で研修が行われる科目

陶芸、漆芸、染、金工、ガラス

○ プランの対象者

本プランでは、工芸に関わる全ての市民、事業者を対象とします。
その関わり方によって、以下のとおり工芸の「作り手」「つなぎ手」「使い手」とします。

◆ 工芸の「作り手」

工芸の作り手とは、作品を作るために自らの手で材料や道具等の素材を集め、作品制作、販売まで行っている者（いわゆる作家（artist））や、工芸品の制作プロセスの一部工程を担当するスペシャリストとして、工芸品の制作活動を支えている者（いわゆる職人（artisan））等のことを指します。
これらの作り手の働き方には、個人事業主として活動する者もいれば、工房の従業員として従事している者もいます。

◆ 工芸の「つなぎ手」

工芸の「つなぎ手」は、「作り手」と「使い手」をつなぐ人材のことです。
ギャラリーやショップを通じて「作り手」の作品の魅力を「使い手」に伝える役割を担うギャラリストやバイヤー、作品を「使い手」により手にとってもらいやすくするためにテーマや展示を企画するコーディネーターや、異業種・異分野のコラボレーションを促すことで、工芸品の新しい需要を生み出すプロデューサー等が「つなぎ手」の役割を担っています。

◆ 工芸の「使い手」

工芸の「使い手」は、工芸に興味を持ち、趣向や目的に沿った作品の購入や工芸の技術や歴史等を通じて、工芸と関わりを持つ人のことです。

○ プランの推進期間

本プランの推進期間は令和２年度から令和11年度の10年間とします。

また、３年ごとに推進状況を確認し、社会情勢の変化や金沢の工芸を取り巻く環境の変化などを考慮しながら、必要に応じてプランを見直します。

○ プランの基本理念と将来像

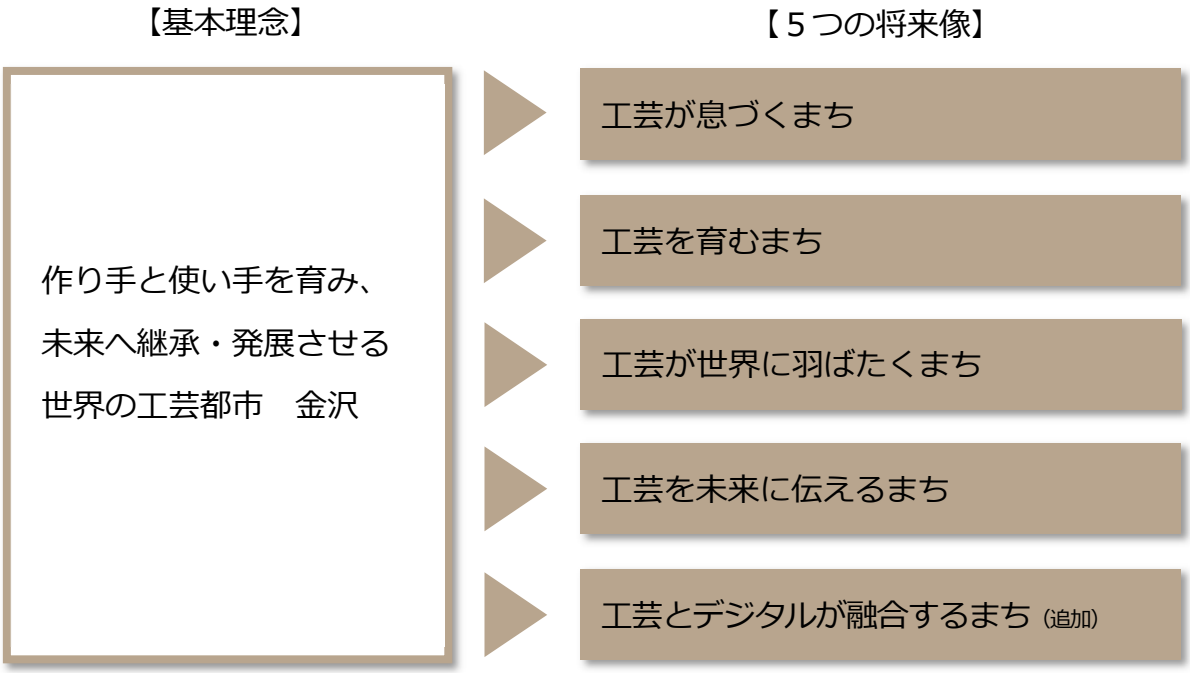
◆ 基本理念

作り手と使い手を育み、未来へ継承・発展させる世界の工芸都市　金沢

工芸が日々の暮らしに息づき、手仕事の技能と知恵を継承・発展させるとともに、心を動かす新しい工芸を創造し、世界を引きつけるまちを目指します。

◆ 将来像

基本理念のもと、策定時の４つの将来像に５つ目の将来像として「工芸とデジタルが融合するまち」を加え、施策展開の柱として位置づけます。



○ プランの体系図

将来像	取り組むべき行動
将来像１ **工芸が息づくまち** 市民生活の中に格調高い技と美に対する豊かな感性を育んできた歴史的背景を大切にし、工芸が暮らしに息づくまちを目指します。	伝統工芸品の需要が低迷する中、金沢の工芸品の需要を生み出すためには、「使い手」が普段の生活から工芸品に触れ、使ってもらうことが重要です。そのため、金沢での暮らしの中に「工芸」が息づく環境を整備します。 また、「作り手」の作品を「使い手」に、「使い手」が求める作品を「作り手」に届きやすくするために、プロデュースや発信をするコーディネーター（「つなぎ手」）の育成も不可欠です。
将来像２ **工芸を育むまち** 工芸に携わる「作り手」「使い手」「つなぎ手」が連携し、工芸を金沢のまち全体で育てる仕組みを作り、工芸を育むまちを目指します。	本市では「作り手」の育成に力を入れており、金沢卯辰山工芸工房や金沢美術工芸大学等から多くの作家・職人を輩出しています。 今後は、技術的な育成環境に加え、自己プロデュース力や経営能力など、「作り手」が自分の力で継続して活動を続けられるよう支援をすることが重要です。 また、工芸に携わる多様な人が金沢に集い活躍する環境を作ることで、「工芸ビジネスの集積地」としての基盤を築くことが必要です。
将来像３ **工芸が世界に羽ばたくまち** 工芸に関するビジネスが集積し、世界の工芸との交流が生まれ、金沢から世界へと工芸が羽ばたくまちを目指します。	金沢は、これまで培ってきた工芸技術を大きな価値とし、工芸の表現の新しい可能性と豊かさを世界へ発信できるまちであり、さらに近年、世界のアートフェア市場において日本の工芸に対する評価が高まっており、国外からの来訪者も増加しています。 そのため、世界的なアートフェアや見本市への出展、工芸を中心とした世界的な催事を金沢で継続的に開催するほか、工芸に関係する世界の多様な人材との交流など、双方向の国際展開により世界市場における金沢の工芸の価値を高めることが大切です。
将来像４ **工芸を未来に伝えるまち** 何世代にも渡り受け継がれてきた技術を継承するとともに革新を加えることで未来に向けて新しい工芸を創造するまちを目指します。	金沢がこれからも世界に誇る工芸のまちであるためには、長年育んできた工芸技術等を後世に継承することが大切です。高度な技術を持つ「作り手」から若い「作り手」へ技術を伝えることに加え、先進的な技術を駆使し、職人技術を記録し保存することが必要です。 また、これらのアーカイブをもとに、既成概念にとらわれない革新的な手法も取り入れ、未来に向けてさらに金沢の工芸の技術を高めることが大切です。 さらに異業種・異分野のコラボレーションを促すことで、工芸に関わる新産業を創出し、工芸の新しい需要を生み出す必要があります。
将来像５（追加） **工芸とデジタルが融合するまち** リアルとデジタルのそれぞれの特徴や良さを活かして、工芸品の需要拡大や若手作家等の育成につなげていくことで、工芸とデジタル技術が融合するまちを目指します。	金沢の工芸が少子高齢・人口減少社会においても活力を維持するためには、若い世代に魅力を周知することが重要です。 そのためには、新型コロナウイルス感染症の拡大を境に急速に進展したデジタル技術の活用は、工芸の世界においても有効な手段です。 新たな需要の創出や後継者・担い手不足の解消に向けて、効果的な情報発信の強化や既存の枠組みにとらわれない時代のニーズに呼応した工芸の新たな価値を生み出すことが必要です。

施策の方向性	具体的な施策
①工芸を身近に感じる機会の創出	・「作り手」と「使い手」が交流する催事の開催支援 ・茶道や華道など工芸品を取り扱う伝統文化の奨励 ・宿泊施設、飲食店等地元企業への工芸品の普及促進 ・体験を販売に結びつける取組みの強化
②工芸に親しむ「使い手」の育成	・市民の工芸の目利き力向上のための意識啓発 ・次世代が工芸品に触れる機会の創出
③「作り手」と「使い手」をつなぐ環境整備	・「つなぎ手」となる人材育成の支援 ・「作り手」「つなぎ手」データベースの作成、充実、情報の提供
①「作り手」のスキルアップ支援	・「作り手」の継続的な事業活動の支援 ・新しい時代に対応したものづくりの推進
②生業として持続できるものづくりの推進	・金沢市や他都市での展示会開催時及び出展時の支援 ・新しい時代に対応した販売手法の研究推進 ・工芸技術を活用した新商品開発・コラボレーション事業への支援 ・「作り手」の技を活かしたコトづくりの強化
③まちなかでの制作環境の整備	・「作り手」がまちなかで活動するための支援 ・「作り手」が集い交流する環境づくりの推進
①世界の工芸分野との人材交流	・金沢市や海外の主要な美術館、展示会等での「作り手」や「つなぎ手」との人材交流
②世界的なアートフェアや見本市への進出、開催	・海外の主要アートフェアや見本市への出展及び出展支援 ・世界に通用するアートフェや見本市の金沢での開催支援
③世界への工芸技術の発信	・「KOGEI Art Gallery 銀座の金沢」を活用した金沢工芸と食の魅力発信（追加） ・工芸技術に関する海外への情報発信の強化 ・海外からの美術工芸愛好家を受け入れる環境づくりの推進
①制作技術等の保存と継承の推進	・伝統工芸技術、素材、道具等の体系的調査と記録の実施 ・伝統工芸技術の習得推進 ・持続可能性を意識したものづくりの推進
②革新的なものづくりの推進	・金沢未来のまち創造館での異業種交流の推進 ・「作り手」を対象とした技術向上研修の推進
①新しい時代に対応した情報発信の強化	・デジタル技術を活用した情報発信の強化 ・デジタル技術を活用した展示会の開催や作家等の魅力発信
②デジタル技術を活用した工芸の価値向上	・デジタル技術を駆使した新たな需要拡大 ・デジタル技術を活用した作品の展開、保存

○ 主なモニタリング指標

本プランの進捗状況を適切に把握するため、以下の主な指標のモニタリング結果を踏まえ、新たな施策の必要性や施策の修正などを検討していきます。

将来像１	工芸が息づくまち		
項目	数値根拠・計測手法	R 元年度末 数値	現状数値 （R４年度末）
・金沢工芸子ども塾、匠会の受講者数	・金沢市集計 （設立からの累計受講者数）	延べ181人	延べ206人
・市民の金沢の工芸品使用割合	・金沢市集計（e-モニター調査）	45.0%	50.3%
・市内飲食店等での工芸品使用程度	・金沢市集計（e-モニター調査）	64.9%	70.7%
・ギャラリー、店舗数	・金沢クラフトビジネス創造機構集計（クラフトインデックス登録数）	83者	100者

将来像２	工芸を育むまち		
項目	数値根拠・計測手法	R 元年度末 数値	現状数値 （R４年度末）
・伝統工芸品産業従事者数	・各業種集計	2,252人	2,080人
・国指定６業種生産額	・各業種集計	102億円	73億円
・作り手の数	・金沢クラフトビジネス創造機構集計（クラフトインデックス登録数）	145者	161者

将来像３	工芸が世界に羽ばたくまち		
項目	数値根拠・計測手法	R 元年度末 数値	現状数値 （R４年度末）
・作家、職人等の国際交流数	・金沢市集計	派遣２招へい７	派遣０招へい２
・アートフェア、見本市等出展・開催者数	・金沢市集計 （アートフェア、見本市出展者調査）	出展３開催１	出展５開催１

将来像４	工芸を未来に伝えるまち		
項目	数値根拠・計測手法	R 元年度末 数値	現状数値 （R４年度末）
・国指定６業種伝統工芸士数	・各業種集計	246人	220人
・工芸技術研修会参加者数	・金沢市集計	209人	135人
・平成の百工比照　収集数	・金沢美術工芸大学集計	約5,600点	約6,200点

将来像５	工芸とデジタルが融合するまち		
項目	数値根拠・計測手法	R 元年度末 数値	現状数値 （R４年度末）
・金沢市デジタル工芸展作品出品数	・金沢市集計	－	1,571点
・金沢市デジタル工芸展閲覧数	・金沢市集計	－	約732,000 ﾍﾟｰｼﾞﾋﾞｭｰ
・デジタルサイネージでの紹介作品数	・金沢市集計	－	－

○ 推進体制

本プランを着実に実践していくためには、工芸の主体である「作り手」「使い手」「つなぎ手」と、工芸の発展を支援する行政とが連携して取組みを進めることが必要です。このため関係者や有識者等で構成する連絡会議を開催（３年に１回）し、各種施策の効果的な推進に努めていきます。

金沢ＫＯＧＥＩアクションプラン

令和２年３月　策定

令和６年３月　改定

発行：金沢市経済局クラフト政策推進課

〒920-8577　金沢市広坂1丁目1番1号

電話：076-220-2373　FAX：076-260-7191

Mail: craft@city.kanazawa.lg.jp